

その時私は・・・

1. 虐待事件？傷害事件？

その時私は、確定申告のための経理入力を明日の朝までに終わらせなければならず、死に物狂いでパソコンを打っていた。

場所はレストランJ。ファミリーレストランであり、また学生たちがレポート書きやテスト勉強のために徹夜に来る、喫茶店よりも気楽な店である。

気が付くと、とある親子が私の5m先のテーブルに座っていた。なんだか様子がおかしい。母親が私と対面する席に、小学3、4年生と思しき男の子が母親と対面して座っていた。男の子は背を向けた形であり、その顔は見えなかった。が、母親は腕を組んだまま顎をしゃくりながら、子どもに声高に怒っていた。男の子はうつむき加減でじっとしていた。何かうっかりものを言えば激しく罵倒される状況が飲み込めた。男の子はいささか食事どころではないと見え、10分ほどは説教を聞きながらじっと固まっていた。

そのうち母親はさらにエスカレートして、

「おかあさんがしんどのいに連れてきてやった。それなのに、なぜ食べない！」

と子どもに向かって怒鳴った。男の子は母親の機嫌が悪くなってからは言葉も出せず、動きもできずでは到底食べられるわけがない。日ごろの事までくわえた頭ごなしの説教は手厳しく続き、その前で食べることなど凶々しくてめっそうもないほど、また聞いていておかしいほど何でもかんでも怒り続けていた。ついに男の子は肩を震わせ始めた。すると母親は手加減するどころか、激しく男言葉で

「食べもせんのにオマエはなぜこんなものを頼んだ！」

「おかあさんがしんどのいから今日はお弁当を買って食べるつもりを、オマエがここがいいというからおかあさんはしんどのいに連れてきてやった。なのに、いったいどういうことだ！」

「いったいどういうつもりだ！」

「ええ加減にせえ！」

「いつも言うことをきかん！だから叩かれるんだな！」

「オマエが悪いんだ。」

と言い始めた。

そのときやっとなんと見ている私の視線に気が付いたのか、今度は男の子を自分の隣の席に座らせて、私にちらちら目をくれながら、男の子の涙を指で拭いてやり、小声で何か言ってギュッと抱きしめた。男の子は抱きしめられて母親に身をゆだねた・・・のではなく、逆にいつそう身を縮めていた。

私はとりあえずそれで終わるのだらうと思って、経理の入力に戻った。感情的になった心は、第三者の視線を感じるだけでも理性は戻るものだ・・・と思ったのは束の間、5分ほどもするとまた怒鳴り声がし始めた。顔を上げると、また事態は振出しに戻っていた。

男の子は元の席に戻り、母親は腕を組んで先ほどと同じ文句を繰り返して罵倒していた。事実などどうでもよいのだらう。怒りが止まらず、執拗に罵倒し、子どもは縮こまって動かなかった。

周囲の耳を意識してなのであろう、汚い男言葉のままでは自分が悪いのではないという主張を始めた。

「オマエがゲームばかりしているから、こんな遅い時間になっただらうが！」

「おかあさんはここに来るのはしんどかった。お前が行きたいと言うから連れてきてやったのに、これは何のざまだ！」

「オマエのせいでこっちは余計にしんどいわ！」

「オマエが悪いのだぞ！」

「いつもいつも、オマエはこんなふうなんだ！」

「オマエは一つも親の言うことを聞かないな！」

「優しくしてやったらつけあがりやがって！」

自分を正当化するような、『普段からこいつは悪い子どもだ、自分はしんどいのに優しくしてやっていた、つけあがって横着しやがって・・・』というような言葉をくどく声高に口にしていた。

周りにはまばらだが、客はあちこちに座っている。その男の子のすぐこちら側のテーブルに女子学生と思しき二人組が座って、話していた。二人は振り返りもせず、聞こえないかのように楽しく笑っている。

私はこの二人が振り返って視線を投げれば、あるいは席を移動すれば、母親の理性が戻るのではと思った。が、それはなかった。なにごともないかのように二人は楽しく話し続けていた。

さらに母親の罵倒は続いた。

「いい加減にせえ！なぐるぞ！」

と母親が短く言った途端、男の子は激しくげほげほとせき込み始めた。吐くのではないかと思うほど激しく、断続的に出始めた。それに追い打ちをかけるような母親の罵倒で、さらにその咳は止まらなくなった。身体をよじって喉の奥から激しい咳が止まらない姿に、母親はさらに逆上した。

突然母親は席を立って、向かいの席の男の子にとびかかっていった。男の子は背を丸めて座っていたが、その姿勢からとっさに椅子に突っ伏して、殴られるこぶしから身をかばって身体を丸めた。その男の子にこぶしを何度も振り上げた。5回、6回。男の子は咳が止まり、固く体を丸めていた。

7回、8回・・・。母親はいったん殴るのをやめたが、男の子が身を縮めたままで起き

上がらないためか、一呼吸おいて

「こいつ！」

とまた殴り始めた。今度は殴り続けるのをやめる気配なく、男の子もじっと動かず、殴られるがままに黙ってじっとこらえていた。

この子は殴られることにも慣れているのだ。だから泣かない。そして、ここでどんなに痛くとも泣き声を上げてはさらに母親を逆上させることも知っていた。

私はパソコンも通帳も放り出して5mを走り、また次の固いこぶしを振り上げた母親の手を掴んだ。

「止めなさい！」

すると、止めるどころかの言葉が飛んで来た。母親は

「なんだ、あんたは！」

と言いながら、さらに今度はこっちに向かってきた。私はもう一度手首を取って少しひねり、動けないように固定した。母親は

「あんたにそんなことを言われる筋合いはない！」

とわめいた。

「ここは皆がいる公衆の場だし、そんなことで子どもを叩いてはいけない！ますます食べられなくなるよ。」

「口を突っ込むな！あんたには関係ない！」

私には男言葉ではなかった。きっと子どもを怒るのに使っていたあれらの汚い『野郎言葉』はすごむために使ったのではなく、彼女自身が子どものころ親から聞いて育った、体にしみこんだ彼女の『家庭内言葉』なのだ。

「さっきからずっと聞いていたけれど、あなたが間違っているよ！止めなさい！」

手首を取られた母親はじたばたしていた。そこに男性スタッフが

「やめてください！」

と遠くから走ってきた。

その時私は、その声の方向・・・右に反応して手を緩めたとたん、母親は右手を私の手から素早く抜き、その右手でこぶしを真正面から私の顔に向かって上から振り降ろしてきた。私はよけ切れず、その右手は私の左の上顎に上から当たった。全くにやみくもな殴り方ではない。彼女はこぶしを使って殴り慣れていた。彼女自身もこうやって殴られて育ったのだろう。

明日が月曜日という日曜日の午後10時半に小学生を食事に連れてくるなど、いくら子どもがゲームに熱中していたとしても、遅すぎる時刻である。また母親のわめいていたセリフから察するに、いつも子どもを殴って言うことを聞かせている。そんな母親が、食事をするためにこの子のゲームを止められないはずはない。単に母親はこの時間までごろご

ろしていたのだろう。

朝食も遅く、昼食はあるかないかで母親こそがゆっくり寝ていたために、夕食が遅くなったのだと思う。この母親が自分の空腹を我慢してまで、この時間に家の中にいたとは思えなかった。

空腹を朝から我慢させられているのはたいてい子どもの方である。母親の目覚めていない朝は開放感がある。ゲームもやり放題である。今の時代、たいてい、ゲームこそが空腹を満たし、耐えられるのである。親がゆっくりごろごろするために、これらの家庭には対外ゲームはいくつも置かれている。

母親は子どもに向かってしきりに『私は体がしんどいんだぞ！』を繰り返していた。『体がしんどいから家の中で食べ物を構える』などという発想はない。『体がしんどい』のにわざわざ外出をし、わざわざ人中で家で作るよりもはるかに高いお金を払って食事をするのだ。そしてたいてい『子どもの方が連れて行ってくれと言ったから連れて行ってやったのに、なんだこいつは！』と帰ってきてからまた殴る蹴る・・・が始まるのである。

『体がしんどい』のにしつこく殴り続けるという一見労力を要する、しんどいと言うのは全く嘘で、家事育児への拒否行動は、怒りと暴力との組み合わせとして簡単に終結し、また『オマエを殴りつかれたわ。』とまたごろごろする極めて自由な大人主導の生活に戻る。

彼女の身に沁みついた『怒る＝殴る』というひとつの条件反射に過ぎないようであった。あれが家の中のごく自然な流れなのだろう。

この子の外食の案に母親自身賛成であったはずだ。もし反対だったとしたら、頑として子どもに有無を言わさず反対を押し切れる母親だ。

この子は家の中の暮らしが苦しく、家の中で母親と二人でお弁当を食べるよりも、家の方の方がずっとほっとするのだ。少しでも家の空気を逃れるために外食をしたかったのだと思う。

「こいつが悪いから、しつけてるんだ。」

「見て！このくらいこいつは食べていない！」

並べ立てられる子どもへの否定に、私は言った。

「見ていたけど、これって虐待ですよ。」

彼女は言葉を先ほどまでのように矢継ぎ早に吐いた。

「なにい！」「こいつが食べんのが悪いと言っているだろう！」「そうじゃないか！」「もったいないだろう！」

「私は全部聞いていましたし見ていましたから、虐待として警察に通報しますよ。」

「どうぞ！できるもんならやってみろ！」

声高なこの親子のやり取りとしつこく子どもをこぶしで殴り続けていたのを、そして2ラウンドが始まり、今度は長そうだったから私が止めたことも、近い場所の客は知ってい

るはずだ。携帯は私の席に置いてあった。母親はなお、子どもに向かって
母親は

「オマエが食べんからこんなことになるんだ！」

とまた怒り続けていた。さすがに店長の目の前では子どもを殴らなかった。

私は5mの距離を戻ると、母親がこちらに飛んでこないのを見て荷物から携帯を取り上げ、『110』を押した。

するとそれを見た母親の行動は早かった。彼らの席はレジのすぐ前あった。母親は即座に会計を払い、男の子をせき立てて、出て行った。

あまりの素早さに私は『虐待の現行犯通報』で110番にかけたものの、当の二人が店外に出ていしまった。私は急いで二人の後を追いかけたが、店の入り口からは駐車場は見え、その間に二人を見失ってしまった。

警察の対応は早かった。

「今からすぐに行きます。駐車場から出る車のナンバーが見られますか？すぐ確認してください。」

と。そしてすぐさまパトカーで向かうと告げた。

私は急いで駐車場に降りて二人を探したが・・・どこにも見当たらなかった。

引き続き電話での指示を受けて駐車場を出て行こうとする車を探したが、わからなかった。私は母親を見失ったので、警察官が来ても無駄足になることを申し訳なく伝えたが、警察は

「それでもかまいません。とにかく向かいます。」

と言った。

私は小雨の中、濡れた道路を二人がどこか走って逃げて走る足音を求めた。すでに夜も更けて、静まり返った道路も出て耳を澄ましたが、そんな音は聞こえなかった。

自転車であったにしても、駐車場の出口から出る自転車もない。いずれにしろ、あの子どもがそんなに素早く走る状態にはないはずだと思い、あちこち人の気配を探したが、わからなかった。

ほんの30秒ほどで、完全に見失ってしまった。

すぐに到着したパトカーから降りた刑事さんに、

「申し訳ありません、二人はもういません。無駄足で・・・。」

と言うと、

「いや、かまいません。どんなだったのですか？」

と訊かれた。

およその所を話したところ、刑事さんは私に

「ところであなたは殴られませんでしたか？」

と訊かれた。

その時私は、自分が殴られたことなどすっかり忘れていた。そういわれて見れば、左の上顎骨の所に違和感がある。触ると小鼻の横の上皮がすりむけ、どうやら出血もしている。こういうのを『かすり傷』と言うんだなあ・・・と感心した。真正面からなら打撲だけか、割れるかだ。固めたこぶしで、上から振り上げて至近距離から殴りつけてきたもんな・・・。そんなことも考えながら触ると、少しずつ頬粘膜の方も少し腫れてきている。上顎骨にあたったんだな・・・。

私の場合、母親は急いで私に一発食らわせようとしたからこうなった・・・殴ったあとができたのである。

虐待を受ける子どもは日々家の中で逃げられないまま、逃げる場所もないままゆっくりとじわじわと、学校の大人達にもそれが分からないようにいろいろな方法でやられている。

なにもあの子がそうだと言うわけではない。しかしそれを思うと、あの母親は反省するどころかだろう。虐待の親は、反省がない。罪悪感がないわけではないが、そんなものよりも、子どものころのつらさからの許容範囲の狭さで目の前の子どもが思い通りにならないことを許せないし、自分の怒りも苦しみも誰も分かってもらえない事、何も思い通りに行かない葛藤を、自分の子どもだけでも強く征服することで束の間解消する。

あの子はまた私のせいで今晚家に帰ってひどく精神的に痛めつけられるのではないか・・・。それが無性に心配になった。

虐待の親は、殴りつけるのに時間と余裕さえあればややこしくならないように表からは簡単にわからないように子どもを痛めつける。

また常に理由が子どもにあるように自分を正当化する。

きっとあの子は今後はイランお世話の他人のおかげで『今夜は飯抜き』にも『今後は外食なし』にもなることだろう。

そんな母親の仕打ちで、どこも子どもの体に傷はつかない。一見、外傷はない。心に傷がつくだけだ。

そして、うっかり人に助けを求めると、母親の方がどこまでもうまく逃げられて、その結果うまく逃げおおせた母親ゆえに事態は家の中でさらにややこしくなり、子どもである自分は苦しいことになる・・・ということを読んでいく。

DV法では、大人の被害者は身体的虐待だけでなく言葉による虐待も認められるようになった。また、加害者である伴侶を逃れて暮らすことも可能である。それゆえ大人の被害者は被害を言語化して訴える。

しかし子どもの被害者は、親から加害行為を『しつけ』『あんたのせい』『あんたのため』と虐待を正当化され、また男の子は母親から嫌われたくない、出て行けと言われたくない

その一心で、すべてを耐える。だから、このつらさ、苦しさは誰にもわかってもらえず、その流れで誰にも助けてもらえない。

そんなことを思いながら、さてどうしたものかと思いついて、朝までに終わらせなければならぬ目の前の経理入力、考えている間に画面が消えては何度もキーを押して、画面を出す・・・の繰り返しとなった。

そうこの考えているうちに、駐車場からあがってきた刑事さんが

「あの人ですか？」

と窓の外を示した。

駐車場の明かりの中で警察官と話しているのは、母親と子どもらしき二人である。駐車場の照明の逆光でシルエットしかわからないが、こんな遅い時間に店内にいた子ども、また親子連れは彼女らだけであったし、背格好はおそらくそうであった。すごい！やっぱりプロは違う！到着後、二人がいなくなったという段階ですぐに店内行きで私と同行した組と二手に分かれたのは、そのためだったのだ。すごい！

私が携帯を持ったまま後を追いかけて降りてきたのを見てとって、母親はずっと帰らず、子どもにまたや指示をして、物陰に隠れていたのだろう。寒い小雨の夜を・・・なんということだ。

母親は、私が警察と電話で話しているのが分かって、またパトカーのサイレンの音がしたことで『虐待の現行犯』として自分が捕まらないように、物陰に隠れていたのだ。

家庭の母親がおおよそ『保護者』ではなく『家庭の子どもには、普通の家庭で普通の育児で育ち、準備物も身の回りも整えてくれる母親に育てられたクラスメート達のささやかな幸せは、決して手に入らない幸せをクラスメート達が見せつけてくるように思い、教室ではつらいしおもしろくない。また勉強どころではない。自分の家での苦勞を理解してくれない学校体制の中で反社会感情が育っていつてしまう。担任の先生に家でのつらさを話す前に、協調性がないことで注意され、先生にまで心が届かない。

刑事さんは私の顔を見て、

「大丈夫ですか？」

と言いながら私の受傷の瞬間の状況を訊いた。

そして私に傷害事件として扱ってほしいかどうかを尋ねた。

私はあくまで虐待事件の現行犯通報のつもりであったので、答えはノーであった。続いて刑事さんは相手に謝罪してほしいかどうかにも私に優しく尋ねてくれた。これも、答えは

ノーとして返した。

いくらかだんだん膨れてくる感じはあった。しかしその時私は・・・刑事さんにあの子どもがどうなったかの方を気にしてほしかった。私よりもはるかにボロボロに傷ついており、今夜これからいっそう危ないのはあの子どもの方であることも伝えた。あの母親は私が誰であるかも知らないから、今夜私を追いかけてこない限り私に報復のしようもない。しかし・・・私が警察に通報したのは、私が殴られたからではない、あの子は日常的に殴られていると言う会話を耳にし、そしてなによりあの子が今夜も危ないからだ。そしてこれからも・・・苦しむことが見えたからだ。

俊敏で優しくかった刑事さん達が、そのことをわかってくれたと思いたい。

2. 傷害事件における日本人ギャラリー

ここで、店内のギャラリーについて、話を戻そう。その時、彼ら親子の背後には二人の女子学生風な女性が座って食事をしていた。殴り続けられていた子ども側の背の本のすぐ後ろに一人座っていたのだ。母親がのしかかるようにして子どもを殴り続けている間、全く気が付かないふうに、二人は笑って話していた。

その時私は、この二人は女性であるし、そこに救いがないと思った途端、飛び出した。

当然であろう。普通の女性なのであるから。こうして後から考えると、私は普通の女性ではないのだろう。

しかし、そのあとである。彼女らは当然、店長さんの次に刑事さんから話を訊かれることとなった。

その時私は・・・その場にいた。当然事件の目撃者として、事件直後に話を訊けるものと思っていた。ところが母親が覆いかぶさって殴り続けていた咳のすぐ背後の席の、笑って話をしていた女性は刑事さんに

「あなたもそれを見ていたのですね？」

と訊かれたとき、あっさりと

「いや、私は背を向けていましたから、全く見ていません。それに私はおしゃべりに夢中になっていましたから、全く知りませんでした。」

私は啞然とした。やはりあのときの私のとっさの判断・・・彼女らに救いは求められない・・・は正しかったのだ。

さらに刑事さんは、対面していたもう一人の女性に話を振った。

「あなたはどうですか？」

その女性のほうは、こう言った。

「たしかにそんなことはありましたね。何度もひどく殴っていました。この人（筆者）が止めるのも無理はないと思うほどでした。この人があの母親を止めたと言う判断は正しいと私も思います。確かに目に余るものでした。」

こちらの女性は、いやでも目に入っていたし、ひどいなと思っていたのだ。となると、それが表情に出ないはずはない。視線も驚いて??釘づけになっていたはずだ。それを話している相手の女性が気が付かないはずはない。殴り続けていたのは、短い瞬間ではなかった。おまけに、ばたんばたん物音もしていた。

そしてその女性はもう一人をかばってこう言った。

「おかあさんは子どもにだけしか聞こえない声で怒っていたので、私は何がどうだったのかはわかりません。」

3. 私が家に帰ってから

私が家に帰ると、私の顔を見て子ども達（成人です!）がいきなり「どうしたの?」と訊いてきた。

その時私は、とっさにどう言い訳しようかな・・・と思いながら、考えて、「殴られた。」と答えたら、子ども達はわあわあとなった。私は喧嘩は売らない人間である。

一通り話をすると、「またまた・・・どうせそんなことだろうと思った。かあさんは本当に危ない人だねえ。」と言われた。

また話はどんどん発展して、子ども達は「問題はその子の今晚だね。危ないねえ。」と言い出した。私は死ぬほどうれしかった。ここに理解者がいた! 帰ってきてよかった。我が家は本当にいい家だ。本当にうれしい子ども達だ。

主人が顔のケガの第一発見者なら、「オマエ、自分の身の方を守れ! いらんことをするな! オマエは女だ!」の一言で終わりであっただろう。私はシュン太郎になるしかない。私は翌日、腫れた側の顔を向けないようにひたすら努力した。

4. 家から逃げられない、逃げ出さない被虐待児たちの小学校生活

これがなぜ『小学校生活』で、『中学校生活』ではないのか。

それは、中学生以上になると、こういった家がつらい子ども達は、家を抜け出して似たような仲間達とたむろするようになるからである。

親は当然、勝手にいなくなった子どもを探しはしない。都合よく万引きか恐喝で飯を喰らい、親を離れて暮らすことができるようになった彼らが親には都合がよい。これまでのように『自腹を切ってまで子どもを食べさせていく』必要はなくなるゆえ、それらを見て見ぬふりをする。学校には『あいつの首に綱をつけておくわけには行かない、自分は寝る時間まで見張りはできない』などと言う。

そして彼らはさみしさを埋めるために、またの世間で普通の幸せを何の努力もなしに手に入れている同年代の子ども達に対する憎しみめいた感情を持ち、親に体で教えられた暴力が一線を越えて出てくることは簡単である。そして彼らが腹の中で思うことは

「おれはずっと、小さいころからこんな程度の殴られ方でなんかじゃなかったぞ！これしきの程度でわあわあ言うな！おれなんか、いつ骨が折れるか、頭が割れるかと思っていたぞ。」

そして、

「おれは、先生にも誰にも助けてもらえなかったぞ！すぐにそんなに大人に泣きつくなんで、あいつ、絶対許せん！」

「学校でイライラしても、先生に怒られるだけ。誰も家の中でこんな風にやられていることから助けもしてくれなかった。学校の先生が母親に注意なんかしたら、オレが告げ口したと言って、家で余計にうまい具合にあざにならないように殴られたもんな。飯抜きとかよ。それからはオレは大変だった。学校はあれでオレを救おうとしたのはわかるけどよ。結果がこれじゃあ・・・。」である。

である。

5. さて・・・

いったい誰が悪いのか。どうすればよかったのか。

普通の子どもの普通の幸せが手に入らない逸脱行為は反社会感情の彼らは、学校では家庭同様、幸せは得られないのだろうか。

有島武郎の『一房のぶどう』の先生のように、『悪いことを悪い』と指摘せずに子どもに何かを考えさせる心を持たせ、正しい理解や自然な反省が生まれる待つ時間を子どもに持たせる大人ではいられないものか。

今の大人社会、家族社会では大人が自分を守ること、自分の仕事をこなすことで精いっぱい子どもが見えない、子どもを待てない。それが悲しい。

ある先生が、先生達への反抗のリーダーシップを取るヤンキー中学生から卒業式の

後で手紙を「あんたにだよ！」と手渡しでもらった。彼女は単なる英語の教科担当であった。

感動したその先生に、私はその手紙を見せてもらった。一生懸命に書いたと思われる彼にしては丁寧な文字で、

『先生、ありがとうよ。またみんなの話を聞きちゃってよ。オレ、先生の事、忘れんき。』と書いてあった。

彼女はいろんなことが起こる中で、彼らの所作を制する、指導を入れるよりもまず「どうしたの？ なにか腹が立つことがあったの？」と訊いていたという。するとだんだんにその時の怒りやいら立ちのみならず、家庭の話まで出るようになり、いろいろと家のぐちやさみしさ、葛藤を聞くようになっていたという。その流れで彼女が現場に現われると彼は穏やかに落ち着きやすくなっていたようである。

ノートなども取らない、テストもほとんど白紙の彼からそんな手紙を直筆でもらったのである。

教育現場で大人達皆が寄ってたかって『オマエはダメだ』扱いをせず、話を聞いてもらえた家の中で孤独な彼は、そのあとどんな生き方になったのだろうか……。

私は幼稚園保育園の先生達への講義で必ず話すことがある。

小学校や中学校になると、勉強やその他、しなければならぬたくさんの題材で大人が子ども達をせかしたり、コンプレックスを持たせたりすることが増えてしまう。

その手前の時期の幼稚園保育園時代……大人と子どもの双方にノルマが少ない間に、できるだけ『大人の心地よさ』『大人に肯定される空間』『否定されずに大人に守られた安堵』を味わわせておくことは、小学校中学校、はたまた高校で様々な葛藤に苦しむようになった時に『自分が生きた過去に心地よい大人が存在した』という貴重な経験は一条の光になり、絶望せずにその後、世の中に出てきやすいものである。

すなわち不登校、非行の子ども達、引きこもりの患者達にそんな大人が存在したかどうかは大切な要素であり、社会にもう一度希望を持ちやすい。家族が彼らをしっかり受け入れたあと、彼らのそういう経験や感覚がそのあと社会復帰しやすいかどうかに関わってくるのである。